

教職大学院

Newsletter

No. 28

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2011.01.31

『気づき』

約30年前は、発達障害という言葉はなかった。養護学校義務化となった当時の特殊教育は、重度化への対応に苦慮していた。0歳台・1歳台の発達段階の児童への教育内容・方法や、遊びの指導についての研究が盛んであり、私も当然そうした研究に巻き込まれていった。それから現在に至るまで、様々な研究会や学習会の中で多くの『気づき』を得、それが教師としての成長をもたらしたと思っている。その中の2つを紹介したいと思う。

一つ目の気づきは、自閉症の子どもたちに出会った1980年代に入った頃である。限られた興味関心、衝動的行動、集団行動からの逸脱等、今までとは異なるタイプに戸惑ったものである。当時の学部研究会は、意思疎通ができない子どもたちに対する指導内容や方法の研究について話し合われていた。その研究の前提は、「子どもたちが指示に従わない。」という一般的風潮から脱却し、「子どもたちは指示が分からない。どのようにふるまえばよいのかが分からない。」という立場に立つということであった。「私たちの意図が分からずに、子どもたちが適切な行動を起こせない。」という『気づき』は、その後の子どもとのかかわりに大きく影響した。子どもに通じる言葉かけ、子どもが分かる状況設定、子どもが行動を起こせる環境設定等、さまざまな工夫を試みることができた。その研究会は、子どもを理解する必要性と、失敗は教師自らの責任とする重要性を学ぶ機会であり、教師生活を支える土台づくりの場でもあった。

二つ目の気づきは90年代である。当時は養護学校の重度・重複化が進み、最重度の言われる子どもたちが入学してきた。どのように子どもたちとかかわればよいのか、子どもの行動をどのように捉えたらよいのかについての学習会が始まった。丁寧なかかわり、子どもの意思や気持ちを大切にしたいかかわ

福井県特別支援教育センター所長 小嵐恵子

りの中で得た『気づき』は、「子どもにはやりたいことがある。子どもたちはやりたいことを自分で決めることができる。」ということであった。子どもの主体性なり自主性はゼロから育てるものではなく、本来子どもは主体的であるという立場に立つと、子どもたちの行動の一つ一つに意味があり、子ども自らが成長していく過程を見取ることができた。それは同時に教師自身の成長を見取る過程でもあった。

以上、二つの気づきを紹介した。この気づきは誰かに教えられたものではないし、私一人で思い至ったものではない。当時の研究会や学習会の中で得られたものであり、当時の同僚たちとの会話の中から生まれてきたものである。

今特別支援教育センターは、主として通常学級における気がかりな子の教育的支援に奔走している。訪問相談や巡回相談等、様々な立場で支援に当たっているが、センター所員自らの専門性を向上させるべく所内での研究を行っている。様々な事例を持ち寄り、その事例の中で子どもたちや個々の担当がどのように成長していくのかについて論議している。そして、その事例の背景として存在している教育相談担当者としての自らの成長も確認していきたいと思っている。拠点校としての特別支援教育センターは、こうした所内での研究会の中で、それぞれの気づきを語り合い、その気づきをより確かなものにしていきたいと思っている。そうした『気づき』が、特別支援教育の充実期を支えるものとなると思っている。

内容

『気づき』(1)

特集1：拠点校研究集会報告(2)

特集2：日本教職大学院研究協議会報告(4)

連携校だより(6)

ラウンドテーブル予告(10)

特集 1：拠点校研究集会報告

第36回 福井大学教育地域科学部附属小学校「教育研究集会」報告 「協働して学びを深める授業をつくる」

福井大学教育地域科学部附属小学校 名葉 浩行
(福井大学教職大学院スクールリーダー養成コース1年)

平成22年12月3日(金)に、本校の第36回教育研究集会が行われた。県内外から、約600名の参会者を迎え、無事に研究集会を終えることができた。御参会いただきました皆様にお礼申し上げますとともに、御指導・御支援や御協力をいただいた福井県教育委員会、福井市教育委員会、福井県小学校教育研究会、ならびに助言者・協力者の皆様に対し、厚くお礼と感謝申し上げます。

今年度は、研究テーマを「協働して学びを深める授業をつくる」と設定し、「つながり合って育つ」姿が生まれる場として、授業に焦点を当て、その中の子どもの姿を、「協働」という視点から見出していくことにした。子どもたちの「協働」とは、相手を思いやる姿勢、互いに学び合う姿勢といった温かな関係、そして刺激し合う関係と考えた。このような「協働」の関係を授業という場でつくり上げ、また、その「協働」の関係が学校生活や家庭生活等の様々な場面で見られることを期待し、研究を進めてきた。

今年度より、研究を2年サイクルで行うことになった。2年サイクルにすることで、研究テーマについての考えをじっくりと深め、次の授業づくりにつなげていくことができると考えたからである。今年度は1年目の研究であり、教育研究集会の授業公開からたくさんのごと得ることができたと思う。当日は、各学年一つずつ授業が公開された。

- 1年 国語「ずうっと、ずっと、大すきだよ」
- 2年 体育「びよんころりん」
- 3年 社会「工場のしごと」
- 4年 総合「ふれあおう！みんな仲間」
- 5年 算数「割合」
- 6年 外国語活動「My Dream」

それぞれの分科会では、子どもの姿を出し合いながら、そこから、「協働している姿」「学びを深める姿」について語られた。しかし、「協働している姿」を出して安心してしま

また、子どもの姿を出し合うだけで意味があるのかという声がかたに聞かれるのも事実である。省察的研究の視点は子どもの見取りからであるという附属小学校の研究のスタイルをもっと参観者に知ってもらうことが必要であると感じた。分科会の話し合いの中から出された「子どもが必要感をもつ課題の設定の仕方」、「グループ活動の意義・目的」など今後の授業づくりでも考えていかなければいけない課題を見ることができた。

全体会では、研究主任の安井教諭から本校のこれまで研究の歩み、研究テーマについてプレゼンがされた。今年度実践された授業の中から、具体的な姿を出し、分かりやすく説明されていた。

また、講演会では、横浜国立大学教授の高木展郎先生より「協働して学ぶことの意義 ～新学習指導要領の理念と関連させて～」と題して、御講演をいただいた。新学習指導要領を見据えての協働学習の意義について分かりやすい内容であった。これからの時代に求められる学力、コミュニケーション能力の育成、リテラシー（考える能力）を高める授業、「聴いて→考えて→つなげる」授業などについて、今後の授業づくりを進めていく中で参考になるものであった。

今回の教育研究集会は、初めての半日開催であり、慌ただしく過ぎた面もあったが得るものは多かった。これからも教科・学年を超えて互いに授業を見合い、授業研究を積み重ねながら、一人一人の教師の指導力を高めていきたい。そして、



「協働する」ことのよさを教師だけが実感するのではなく、実際の学び手である子どもたちにどのようにその良さを実感させていくのかも考えていきたい。テーマの中の協働は、子

どもたちだけでなく我々教師集団も協働して学びを深めることができる集団でありたい。

教職専門性開発コース1年 法山 裕子 (福井大学教育地域科学部附属小学校インターンシップ)

私は、今回の附属小学校研究集会に、インターン生として、そして附属小学校のメンバーの一員というこれまでとは違った形で参加させていただくことによって、多くのことを学んだ。

まずは、この研究会に向けての学校の取り組みである。この日のために、授業の準備、指導案の検討、全体会の運営、会場設営、掲示板の準備など、多くの準備がなされているということに驚いた。これまで、様々な学校の研究大会に参加させていただいているが、私はこのような事前の準備風景は想像もしていなかった。むしろ、全体会や分科会の意味もよくわからないまま参加していたように感じる。全体会は、それぞれの学校の研究内容や授業で大切にしていることを伝える場であり、その説明を受けて授業を見ることに意味があるのだと考えさせられた。また、分科会は、当日の授業についての話や教師の思いだけでなく、その日の子どもの様子や、これまでの子どもの取り組みの様子なども語り合われる場であることも知った。学部時代は、ただ研究大会に参加しているだけで、学ぶことのできるポイントを見落としてきたように思う。廊下の掲示板は、これまでの授業の流れが参観者の人にもわかるように、わかりやすくまとめられている。このような廊下の掲示物や張り紙一つにしても、参観者に役立つための工夫が散りばめられているのである。

次に、先生方の熱い思いというのに気付かされた。授業者の先生はもちろんのこと、研究集会に学校全体で取り組み、乗り越えていこうという姿勢を見ることができた。附属小学校では、これまで年間を通して授業を見合い、研究会を重ねてきている。年に4回行われるバズセッションでは、学年や教科を越え、指導案の検討や授業の相談を行っている。この

ような積み重ねがあって、研究集会を迎えているのである。附属小学校の研究テーマである「協働して学びを深める授業をつくる」ためには、先生方の日々の協働があってこそ生み出されるものなのだろう。

授業に関しては、インターンで配属されているのが6年生ということもあり、私は6年生の外国語活動に多く関わらせていただいた。授業に取り入れられた活動では、英語を使って「何とか伝えたい」「相手のことを知りたい」という、人とコミュニケーションをする必然性があった。また、「どうしたら伝えられるだろう?」「伝えたいことがあるのに英語だとわからない」といった試行錯誤する姿も見ることができた。自分の知っている英語を使って何とか伝えようとしていたり、相手の言っていることを少しでも理解しようとしていたり、仲間と助け合いながら、身振り手振りをしながらコミュニケーションしようしたりする姿。子どもたちにとって得るものが多かった時間であった。そしてそれは、教師の児童理解や教材研究によって達成されるものなのだと思う。

研究大会というのは、日々の授業のお披露目の場であるのかもしれない。しかし、その日1日に詰め込まれているものが全てではなく、その日まで長い時間をかけ、子どもと向き合ってきた先生方の思いが背景にあるということを忘れてはならないと痛感した。



特集 2 : 日本教職大学院協会研究協議会報告

日本の教員免許状改革と教職大学院の行方

日本教職大学院協会理事／福井大学教職大学院 松木 健一

日本教職大学院協会は、教職大学院研究協議会を「教員養成・研修の高度化と教職大学院の在り方～4+α，専門免許の行方は～」(2010.12.12)をテーマに開催し、会場の学術総合センターには全国から約350名の大学教員・院生等が集まりました。文部科学省磯田文雄高等教育局長ほか文部科学省関係者も多数参加され、教員免許制度と教職大学院の関係に対する関心の高さを窺い知ることができました。研究協議会では、鈴木寛副大臣の基調講演「教員免許制度改革と教職大学院への期待」、教職大学院の修了生によるポスター発表、修了生及び在学生在が参加するFDシンポジウム「教職大学院における実習の現状と展望—ストレートマスターが語る成果と課題—」、さらには、田村哲夫氏(中央教育審議会副会長)等によるパネルディスカッションが行われました。

ポスター発表については美浜中学校の川畑先生にお任せするとして、ここでは鈴木副大臣の基調講演とFDシンポジウムの学校実習について報告したいと思います。

鈴木副大臣は、現在、中間まとめの段階に入った中教審(教員の資質特別部会)の様子を紹介しながら、「学校現場における実践力・応用力等の高度な専門性の育成を図る教職大学院は、今後修士レベルの課程等の受け皿として主力を担うことが想定されるが、具体的な教職課程等の見直しに併せて、教職大学院の在り方についても検討が必要である」と述べ、教職大学院に対する期待を表明しました。今後の政局の行方によっては、教員免許状改革も変化することも予想されますが、教職大学院としては、どのような事態にも対処できる実践力を培っていくことが肝心であると痛感するところです。

次にFDシンポジウムでは、学校実習を取り上げました。教

「理論と実践の架橋の具現化」に関する長期の学校実習の課題

省察的実践がなされているか 大学教員の学校訪問がなされているか、大学での省察を促す機会があるか、

大学院授業との緊密な繋がりがあがるか 学校のメンター教員の役割が機能しているか

学校実習をコアとしたカリキュラム設計になっているか、
実習を念頭に置いた大学院授業になっているか

学部段階での教育実習を凌駕する学校実習の課題

10単位⇒新採用レベルの教員としての資質を保証する実習になっているか 課題を決めてのより進化した実習になっているか

実習校の状況に依拠しているが大丈夫か
大学教員の実習校の醸成を踏まえた緊密な支援がなされているか

多様な教師の職務にかかわる学校実習の課題

年間を通した長期の学校実習になっているか

校務分掌を持つ実習になっているか
学校の年間サイクルのリズムに合った実習になっているか
子どもの成長発達の見取りのできる実習になっているか
学級運営についての経験ができる実習になっているか
気がかりな児童生徒への相談指導が経験できる実習になっているか
保護者とのコミュニケーション経験が持てる実習になっているか

職大学院は学校実習に特徴がありますが、その実態は、各大学によって大きく異なるようです。教職大学院協会のFD・授業改善委員会では、全教職大学院に調査を行いました。その結果、大凡「短期課題設定型・異校種型」実習か、年間を通した長期実習科に大別できるようです。

実際行われている学校実習に関して、実習生からの発言をまとめると、学校実習の課題が見えてきました。学校実習には「理論と実践の架橋の具現化」にかかわる課題、学部段階での教育実習を凌駕する学校実習としての課題、多様な教師の職務にかかわる学校実習の課題としての課題です。そして、この3つの課題を解決するためには、上図に示したような問題意識が必要であることが明らかになりました。

今後、教員免許状改革の中で学校実習をどう位置付けるかが大きな鍵となります。教職大学院は、そのモデルの提供を期待されており、その期待に応える学校実習を実現するためにも、さらなる大学院間連携を強めていきたいものです。

「審議経過報告(案)」の主な内容

平成22年11月30日 中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会(第7回)資料

○教員養成の在り方について

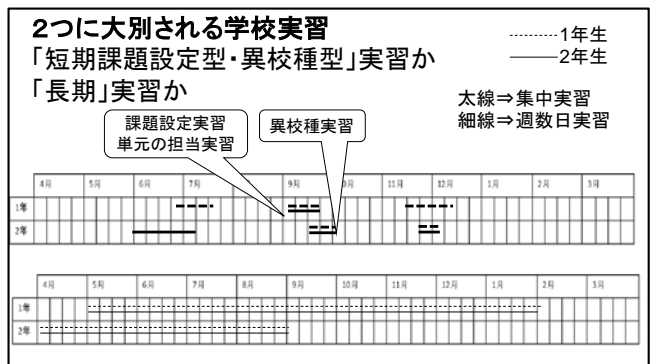
- 教員養成は、学部4年に加え、1年から2年程度の修士レベルの課程等で学修を要すること(修士レベル化)について、今後検討を進める。
- 学校現場における実践力・応用力など教職としての高度な専門性の育成を図る教職大学院は、修士レベルの課程等の受け皿として主力を担うことが想定されるが、具体的な教職課程等の見直しに併せて、教職大学院の在り方についても検討が必要である。

○教員免許制度について

- 教員養成の修士レベル化について今後検討を進めることとし、その際、例えば、当面は、学士課程修了者に暫定的な資格(「基礎免許状(仮称)」)を付与し、教員として採用された後に、必要な課程等を修了すれば修士レベルの資格(「一般免許状(仮称)」)を付与することも検討する。
- 教員免許状により一定の専門性を公的に証明する「専門免許状(仮称)」を創設することについて検討する。

○教育委員会・大学等の関係機関の連携・協働について

教育委員会・大学をはじめとする関係機関や地域社会が一体となって教員を養成し、支援していくことが重要であることから、大学の教職課程の認定や評価、「専門免許状(仮称)」授与の際の履歴の評価、大学と教育委員会とが連携した研修の実施等において、これら関係者の連携・協働がより広範かつ確実に行われるような仕組みを構築する必要がある。



ポスターセッション

私は、12月12日に東京で行われた「日本教職大学院協会ポスターセッション」に参加して参りました。全国の教職大学院で学んでいる院生や修了生が一堂に会し、それぞれの教職大学院の実践・取組・成果について、それぞれがまとめたポスターをもとに発表し合いました。私は、現在の美浜中学校の研究体制と、その体制がつけられるまでの過程、福井大学教職大学院との関係についてポスターにまとめ、発表を行いました。前研究主任の知場先生にも同行してもらい、改革当時の様子を話していただきました。

当日は、全国から23の教職大学院の参加がありました。ポスターの内容については、自分の授業実践についてまとめたものや教科指導についての研究、生徒指導上の課題への対応、大学院間の連携についてなど、大学によってかなりバラエティに富んでいたように思います。全体的に、個人での研究内容が多く、今回の美浜中学校の発表のような、学校全体の取組についてのものは少なかったように感じました。これは、福井大学教職大学院の運営のスタイルが、他の大学院と少し異なっていることによるものだと思います。

福井大学教職大学院は、大学院の先生方が院生の勤める学校現場に直接出向き、学校と協働で研究を進める形をとって

美浜町美浜中学校 川畑 成央

います。大学院で学んでいる者だけではなく、学校の研究運営そのものにより刺激を与えてくれます。今回、ポスターセッションに参加し、他の大学院の様子を見聞きできたことで、そうした福井大学教職大学院の特長を改めて知ることができたように感じます。

美浜中学校は、福井大学教職大学院が設立されたときに、拠点校として指定を受けました。以来、3代にわたり、この大学院で美浜中の教員が学び、大学院の先生方にも何度も足を運んでいただきながら、現在の研究体制をともに創ってきました。授業研究を中心とした今の研究体制を維持できているのも、外部の目として取組の様子を適宜評価していただいている教職大学院の存在が大きいと言えます。

大学院の川上先生から、東京でこういう発表会あるので参加してみないか、と言われたときには、正直、尻込みしてしまいました。しかし、発表に向けてポスターを制作する中で、美浜中学校の研究実践の歩みを振り返るよい機会となりました。今後も、この大学院での学びを生かし、さらによりよい実践につなげていきたいと思っています。

(ポスターは最終頁に掲載)



連携校だより

越前市味真野小学校
多田 昌弘

本校は、越前市の南東部（越前市池泉町）に位置し、校庭の中央には樹齢 140 年を越えた「エドヒガンザクラ」がある



ことで有名な学校です。この桜の木は、本校のシンボルにもなっていて、児童を含めて味真野地区全体で守り続けています。春に満開となった時には、地区の方々によって夜のライトアップが行われ、学校というよりも観光名所となり、多くの方が桜を見に来られ、休日ともなると、大変混雑する程です。昨年春には「シカゴ・ブードル」というグループが、今年春に発売する曲のプロモーションビデオの撮影にやってきました。児童もこの撮影に協力しました。出来上がったビデオの 1 シーンに味真野小学校の児童が出てくるのを、楽しみに待っているところです。この桜にちなんで本校の伝統的な行事として「さくら集会」があります。年度当初であわただしい中、児童会が企画運営を行い、全校で桜を取り囲んでゲームをしたり、お団子を食ったりして楽しみます。全校児童がとても楽しみにしている行事です。また、校舎から校庭の桜を眺めると、桜のバックには越前富士と呼ばれている「日野山」が四季折々に美しい姿を見せてくれます。さらに、味真野地区には多くの史跡や名所があり、歴史的にも素晴らしい地区です。昨年度と今年度には PTA 主催の行事として、この素晴らしい味真野地区を再発見するために、味真野地区内を親子で散策して歩く活動も行われました。このように豊かな自然、素晴らしい伝統、そして温かい地区の方々に囲まれて、味真野小学校の子どもたちは仲よく元気に素直に育っています。

本校は平成 17・18・19 年度の 3 年間に「確かな学力育成のための実践研究事業」として、

「子どもが自ら学ぼうとする力の育成」
—自分の思いを伝える子・高め合う子をめざして—

という研究主題のもと、1 年から 4 年は国語科、5・6 年は算数科の研究に取り組みました。児童が互いに自分の考えを

持ち、その考えを伝え合いながら、学習を展開していく授業をめざして取り組みました。平成 19 年度の発表会に向けて、平成 17・18 年度に授業公開を行うなど、授業研究会を重ね、研究を進めていきました。発表会後も、この研究主題のもと、校内研究を進めてきています。

今年度は、一人 1 授業の授業公開を行って、その授業をもとに、教師同士の学び合いの場として、「授業学習会」を行いながら研究主題に迫る取り組みを行っています。今年度は本校児童にとって大きな課題となっている「読解力」育成に、国語科を中心として取り組んでいます。年度当初に立てた授業公開スケジュールに従い、月曜日の 5 校時に授業公開を行い、放課後に公開された授業をもとに、異学年の職員で構成された小グループで授業学習会を行います。指導案は本時の活動の流れと目標が記載された簡単なものを使います。児童にとって今日の授業はどうであったか最も重要であることから、授業での児童の様子や反応を参観者が見取って、それをもとに授業学習会で授業の分析をしていきます。その中で改善点が見つかった場合は、改善策について参観者が今までの経験



や先進校の視察などで得た知識などをもとに検討し、授業者に対して提案するようにしています。このような教師の語り合いを行うことによって、授業者にとっては次時に向けて見通しが明るくなり、参観者にとっては様々なケースの解決策を知ることができたと考えています。このような語り合いを行うことで、教師が指導力を高め、児童にとってより価値のある授業を行うことができるようになっていけたらと考えています。

こういった取り組みを重ねていながら、素晴らしい子どもたちのために、教師も児童のがんばりに負けず、力を合わせてがんばっていききたいと思います。

おい町立名田庄小学校 早川 勇治

本校は、福井県の最南端に位置する小学校です。校区が非常に広く、ほとんどの児童がスクールバスで通学しています。(熊騒動で、学校の近くの児童もバス通学中です。)児童数151人、各学年1クラスと特別支援学級1クラスの計7クラス、教職員数14人の小さな学校です。

本校の特色といえば、何ととっても活発な異年齢集団(たてわり集団)活動です。この活動は、グランドデザインの重点課題の1番目に位置付けられています。全校児童を4色(赤・白・青・黄)に分けて集団を作り、年間を通して集会活動や学校行事に取り組みます。そして児童相互のきずなを深めていきます。たてわり活動のメインは、たてわりまつり(一般的な運動会のこと)です。ねらいが、子どもたちの自主性を伸ばし、縦のつながりを深めることや子どもたちの活躍する場を増やし、協力して活動する中で、成就感を味わわせることにあるので、個人種目である徒競走はもちろんあり

ません。総合優勝や応援賞を目指すのは他校と変わりありませんが、全校児童が参加する5つの種目にもそれぞれ特別賞が設けられています。



言葉遊び集会の様子

合計8つのトロフィ

ー&カップを目指して繰り返される活動は実に生き生きとしています。種目や応援の練習内容は当然のことですが、リーダーである6年生が考えます。これがまた6年生を大きく成長させます。

本校のグランドデザインには、重点課題の他にも、「健やかな体」「豊かな心」「確かな学力」をはぐくむための取り組みが示されています。そして、本校の研究はこのグランドデザインの「確かな学力」をはぐくむことを目指したものととらえています。

研究主題は、「わいわい話し合う子どもの育成～算数科を窓口として～」です。本校では、「わいわい話し合う」とは、自分の考えを他の子どもの考えと係わせ、主体的な学びをする子と定義しています。そして、今年度は、研究の方針・方法として次の6点を挙げて実践しています。

(1) New授業づくりマニフェストに沿って授業を実践する。

(2) 授業研究の力点をシフトする。

- ・事前研究重視 → 事後研究重視
- ・授業案重視 → 授業の事実重視

- ・教授技術中心 → 子どもの学ぶ姿中心
- (3) 小グループによる話し合いを進める。
- (4) 保護者向け研究発表会を実施する。
- (5) 授業公開をし、記録を取り合う。(Good授業ナビIIの追試を含む)
- (6) 実践記録を作成する。

- ・New授業づくりマニフェスト
- ・夏期実践(実践書を読み解く)
- ・授業公開記録(Good授業ナビIIの追試を含む)

授業づくりマニフェストというのは、教師の指導力向上を目指した取り組みです。授業者が現状分析をして、「今年は、〇〇な授業を目指します!」と宣言します。そして、具体的方策を公開します。その後日々の授業で実践し省察を行います。現状分析や具体的方策及び省察については、各自が文章化しますし、小グループでの話し合いもあります。ある種のパフォーマンス要素があるかも知れませんが、宣言することで自分を奮い立たせることができますし、自己評価もはっきりできます。もちろん、話し合うことで、同僚から学ぶこともできます。

授業の力点をシフトすることに関しては、新たな取り組みができました。今までは共同参観した授業を小グループそして全体で話し合うことで事後研究会を終了していたのですが、今年は次時の授業展開をみんなで考え、授業者に返すという取り組みを行いました。事前研究会では、子どもの姿がわからないまま授業展開について意見を言いますが、次時の授業展開を考えると、授業を参観したことにより子どもの姿を見ていますので、実態に即した意見が出せます。今年は小グループで授業展開案を考えたのですが、その案をもらった授業者は、大喜びでした。参観した側も授業者にお礼ができますし、授業者も助かります。こんな互恵の取り組みは今後も続けていきたいと思っています。

保護者向け研究発表会とは、文字通り保護者を対象にした本校の研究発表会です。もちろん指導案もあります。と言いましても、保護者対象の指導案ですので、教育専門用語等は平易な言葉に置き換えます。このときに指導者側には新たな見方考え方が生まれているようです。

3学期には、これらの取り組みをまとめたいと思っています。読むことで学び、書くことで学び、発表することで学びと何度も学びを体験していきます。



南越前町立南条小学校 赤澤 達郎

南越前町は、平成 17 年 1 月 1 日に旧南条町・今庄町・河野村が合併してできた町です。本校がある南条地区は、中央を清流日野川が流れ、北に日野山がそびえる自然豊かな地区で、花はすの生産が盛んに行われています。本校は平成 16 年 12 月に「自然という素材を活用した、環境に優しい学校【エコスクール】」として完成しました。レンガ造りの外壁に、環境を配慮した太陽光や風力・水力などの発電や太陽熱を利用した給湯施設、生ゴミ処理機やビオトープなど自然のすばらしさを体験できる施設があり、総合的な学習や理科の授業などに役立っています。

今年度は研究テーマを「人とつながり合いの中で、ともに学び合う子どもの育成」と設定し、研究を進めています。子どもの学びを見取ることを授業研究の中心とし、低中高学年部会ごとに、授業公開を行い、教員の協働体制を築いているところです。また、研究の一つの視点として、「異学年や地域の人と交流」を設け、活動を行っています。その活動の様子について紹介します。

<なかよし班活動>

なかよし班は 1 年から 6 年までの縦割りの班で構成し、全部で 24 班（各班 15 名程）あります。毎月 1 回、業間の時間になかよし班で遊ぶ活動を行っています。ドッジボールやハンカチ落とし、しっぽ取り鬼ごっこなど、6 年生が遊びのを企画運営し、1 年から 6 年生が仲良く遊んでいます。また、前後期に 1 回、大型集会を計画し、ゲームやクイズ、ウォークラリーを全校で行っています。6 年生は、リーダーとして行動する自覚が育ってきています。また、休み時間などにも



なかよし班遊び

学年関係なく、気軽に声を掛け合えるようになっています。

<ペア学年活動>

ペア学年（1 年と 6 年、2 年と 5 年、3 年と 4 年）を設けて活動しています。ペア学年は、学校園で栽培しているサツマイモの苗植えや収穫、なわとび大会などで活用しています。低学年では活動が難しい場面で、高学年がうまく手助けをしています。また、学習で取り組んだことを発表し、感想を聞くことで自分たちの活動の振り返りを行うこともあります。相手意識を持って、発表する姿が見られています。

<総合的な学習>

5 年生の総合的な学習の時間には、「農家に負けない米作り」というテーマで、地域に昔から伝わる「牧谷珍子」という名前の米作りを行っています。（「牧谷珍子」というのはこの土地に適した稲の品種を作り上げるために育成されてきたものです。）種もみまきから田植え、稲刈りと地域の人たちの手を借りながら活動しています。さらに精米された米は学校給食に利用されたり、5 年生が感謝の気持ちを伝えるために、お世話になった方々を招待するための調理実習に役立てたりしています。

また、6 年生では地区の幼稚園や保育所へ出かけ、子どもたちと交流を行っています。小さな子どもたちとどんな遊びをするのか、どんな遊び道具がいいのかなど、小さい子の身になって創意工夫をこらした活動ができました。

これらの活動を通して、同学年だけでなく異学年や地域の人たちとの交流を通して、社会性を身につけ、相手のことを思いやる子が育ってくれることを願っています。



牧谷珍子の刈り取り（5 年生）

武生東小学校 内田 達男

本校は、江戸時代の府中藩「立教館」を前身として、明治2年に現在の越前市市役所の地に「進修小学校」として設立された。



耐震工事の連続

来年、創立140周年を迎える歴史のある小学校である。昭和31年、JR武生駅近くの現在の場所に新築移転されたが、近年は校舎の老朽化に伴う耐震工事で、体育館の改築、校舎の減築工事が行われており、校舎内外が工事用バリケードで取り囲まれている。そのため、学期途中での教室や職員室の移動、迂回路使用など不便な学校生活を強いられている。

地域に目を向けると、以前は駅前の商店街として栄えていた地区も、市街地のドーナツ化現象、核家族化、少子高齢化が目立つ地域になっている。児童数も最高時（昭和33年）は1800人を越えていたが、現在は250名、学級数10クラスと急激に減少している。しかし、地域の人たちは「武生で一番の学校」という思いが強く、本校に対する期待は非常に大きいものを感じる。

また、本校の特色として、児童が飛ばした風船の手紙をきっかけに静岡県浜松市積志小学校と姉妹校の交流を続けており、来年は50周年を迎える。この交流では、6月に本校5年生全員が積志小学校を訪問し、両校の児童で浜松市内をグループに分かれて散策する。10月には、積志小学校の5年生を全校で迎え、本校5年生が越前市内を案内したり伝統工芸作りの体験をしたりしている。この交流をきっかけに、大人になってからも文通をしたり、お互いが行き来をしたりと交流が続いている事例も多く、地域の人や保護者にとっても本校の自慢の一つである。

校内研究については、昨年度まで道徳教育実践研究推進校の地域指定を受け、低・中・高学年の3つの部会に分かれながら、道徳単元学習の研究実践を進めてきた。福井大学教職大学院の連携校として、大学院の先生方にも本校の研究について助言していただいていた。また、本年度からは、魅力ある

学校づくり調査研究事業の協力校として、武生第一中学校と校区の4小学校が連携しながら



学び合いをする子どもの姿（1年生）

ら、豊かな人間関係づくりや「気づきのある授業・わかる授業・児童が参加する授業」づくりについて取り組んでいる。

本年度の本校の具体的な取り組みの1つとして、学期に1回を目標とした授業公開をはじめた。担当する子どもの1年間の学びをみるのではなく、6年間という長いスパンの中での子どもの学びをとらえるという視点からだ。学校行事が多く、その合間をぬっての授業公開ではあるが、1学期7回、2学期9回の公開授業が実施できた。手隙の職員は少なく、学級事務で精一杯という現状から、授業参観は任意とし、45分間全部を参観しなくても都合のつく時間帯だけの参観もOKとしている。自習体制での参観も可能になり、小学校では有効である。また、授業後はミニ授業研究会を実施しているが、都合がつかない場合は授業記録をメモとして残し授業者に伝えるようにしている。記録メモからヒントをもらい、次時に子どもの力で課題解決できた実践について、職員室でうれしそうに語る先生の姿を見ると、この授業記録メモからも小さなコミュニティが形成されていることを実感する。

また、2学期のスタートにあたり、「2学期に向けてパワーアップ」と称して、小グループによる語り合いの場を設けることにした。学級づく



りアンケートからの対策やクラスで気になる子について語り、悩みや思いを共有するようにした。教職大学院での合同カンファレンスやクロスセッションのようなものである。

2学期に行われた学習発表会でも、総合的な学習や教科・道徳などと絡めながら、生き生きと活動する児童の姿を映し出す学年ブース発表ができた。しかし、6年間の学びの視点に立つと、学年を解いた児童や教師の協働、コラボレーションの余地があったようにも思う。

冬季休業中には、アサーション演習や2学期を振り返る現職教育を行うことにしている。授業公開は3学期も引き続き行っていく。これらの実践を通じて、これから授業改革や開かれた学校コミュニティが少しずつ進められていくと考える。

学習発表会—
自作のアフリカン楽器の
使い方を紹介（6年生）

実践し 省察する コミュニティ

*Fukui Round Tables:
Spring Sessions
For Reflective Practice
And Organizational Learning
in University of Fukui*

For Communities of Practice and Reflection

専門職として学び合うコミュニティを培う
日本の教師教育改革のための福井会議2011
2/26(sat) 12:40-17:50

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011
2/27(sun) 8:30-14:00

福井大学教育地域科学部 1号館

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2011.2.26-27

福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻
共催 福井大学高等教育推進センター / 福井大学教育地域科学部・大学院FD委員会
教育実践研究フォーラム / 社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会

参加申し込みについて

- 申し込みの詳しい方法については福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/>をご覧ください。
(受付はホームページから申込書をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は1月15日から2月17日を予定しています。)
- 2/27のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。

designed by Fukuikoubou ver.2.1 2010.1.12



2/26(sat) 12:40-17:50

専門職として学び合うコミュニティを培う

For Professional Learning Communities

日本の教師教育改革のための福井会議 2011/since1996

session I 12:40-13:50 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

Zone A 学校：新しい時代の学びを拓く/学校拠点の実践研究

Zone B 教師：教師の力量形成を支える/教師教育改革の実践

Zone C コミュニティ：職場と地域の学び合うコミュニティ

session II 14:00-15:10 三つの問題提起 方向性を探る symposiums

symposium1：社会力=新しい時代に生きる力を育てる
門脇厚司/森透

symposium2：教師教育改革の展望

symposium3：アジアの教師教育

session III 15:20-17:10 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

Zone A 学校：学校拠点の実践研究の持続的な発展

Zone B 教師：教師教育改革の実践と展望

Zone C コミュニティ：専門職の力量形成とコミュニティ

session IV 17:20-17:50

教師教育改革・専門職改革のデザイン：福井からの発信

実践的な展望をひらくために for perspective transformation

2/27(sun) 8:30-14:00

学校改革実践研究 福井ラウンドテーブル 2011 /since2001

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る round table cross sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

session V 協働探究 展開を語る/プロセスを聞き取る 8:30-14:00

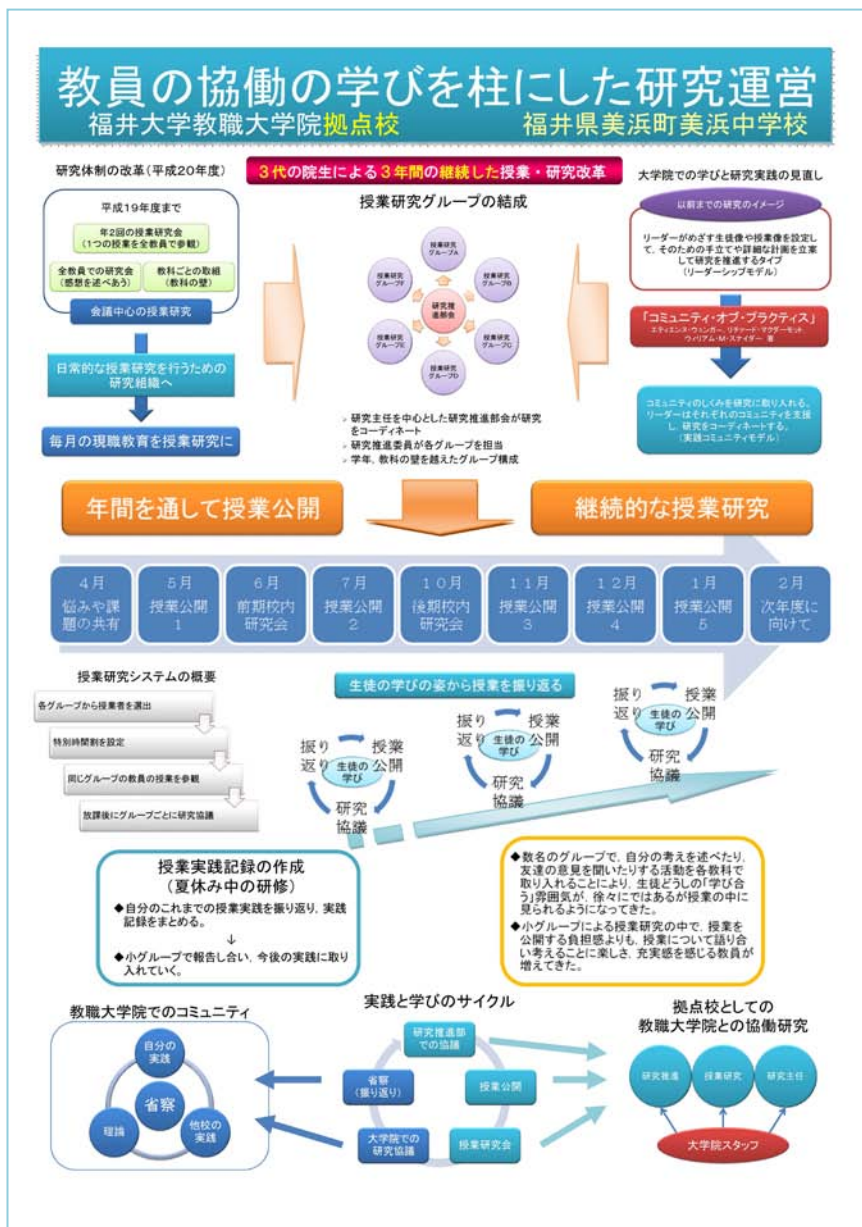
①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40

④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00 (現段階での予定です。進行表には変更の可能性があります。)

27日のラウンドテーブルの参加についてのお願い=午前午後全日程(8:30-14:00)の参加をお願いします。

●ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開をじっくり聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:30-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:30-14:00の全日程に参加できるメンバーが進めますので、よろしくお願いたします。

日本教職大学院協会ポスターセッション (記事掲載は5頁)



Schedule

- 2/5 sat 入学者選抜試験 (第2次) 2/26 sat -2/27 sun 実践研究福井ラウンドテーブル
- 2/12 sat 長期実践研究報告会 (9:30-12:30) 3/23 tue 学位記授与式

[編集後記] 今年は何年にもない大雪となりました。除雪に加えて、突然の休校・休講への対応など、普段とは異なる慌ただしさがありました。そんな中、2年目の院生たちは、長期実践報告の仕上げに臨んでいます。教職大学院での取り組みがどのような実践の芽となるのか。今はまだ深い雪の奥底ですが、強い根を下ろすための要素は確実に蓄えられています。春の雪解けが楽しみです。実践コミュニティの持続的発展を支えるスタッフとして、さらに深く強い根が下ろされる土壌を耕すことに力を注いでいきたいと思っております。寄稿者の皆様、お忙しい中、原稿執筆ありがとうございます。 (遠藤貴広)

教職大学院 Newsletter **No.28**

2011.01.31 発行
2011.01.31 印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp